



JAPANEDU: Jurnal Pendidikan dan Pengajaran Bahasa Jepang

<http://ejournal.upi.edu/index.php/japanedu/index>

母語話者と上級日本語学習者の接触場面における言語調整：母語 場面との比較

Language Adjustment on a Contact Situations Between Native Speakers and Advanced Japanese
Learners: a Comparison With Native Speakers Situations

Dwiky Yoseph Christopher

Graduate School of International Development Communication Sciences Department, Nagoya University, Nagoya, Japan
dwikyosephc@gmail.com

ABSTRACT

The situations where both native and non-native speakers participate in a conversation are called contact situations. In these situations, both native and non-native speakers make verbal behaviour adjustments to achieve a smooth conversation. Adjustments by native speakers usually are made in form of Foreigner Talk (FT) while adjustments by non-native speakers made by performing communication strategies (CS). The common point between FT and CS comes from the lack of language ability or resource deficit. However, higher the non-native speakers' second language proficiency, the adjustments made by both speakers are expected to be more complex. This paper is aiming to investigate those verbal adjustments made by native speakers in the contact situations with advanced learners / non-native speakers. To do it, this paper is employing n-gram method to gain the database of collocation and its occurrence frequency. The data for this research are Nagoya University Conversation Corpus and Nagoya University Japanese Learners Corpus. From the data, this paper found verbal behaviour adjustments which takes form in expressions such are “un” which coined at the end of own utterance, “tokaitte”, and “sounanda”.

KEYWORDS

Contact scene; Non-native speaker corpus; n-gram; Discourse function

ARTICLE INFO

First received: 06 August 2018

Final proof accepted: 27 December 2018

Available online: 31 December 2018

はじめに

近年、在日外国人の人口の増加に伴い、母語話者と非母語話者の会話場面も多く見られる。Neustupny (1985) は、非母語話者を含む会話の場面を「接触場面 (contact situations)」と呼び、母語話者同士の会話場面である「母語場面

(native situations)」とは本質的にコミュニケーションの仕方が異なると述べている。また、村岡 (2016) は接触場面を (1) 相手言語接触場面、(2) 第三者言語接触場面、と (3) 共通言語接触場面、3 つの類型に分類し、各類型は異なる規範を持っていると述べている。村岡 (2016) による

と、母語話者と非母語話者の会話場面は「相手言語接触場面」であり、母語話者は相手を支援する言語ホストという役割を担い、非母語話者は支援を求める言語ゲストの立場になるという。相手言語接触場面でよくみられる言語ホストの行動として、フォリナー・トーク (Foreigner Talk)、積極的な話題提供と質問などがあげられる。

以上村岡 (2016) が述べたように、母語話者と非母語話者は言語ホスト・言語ゲストという関係に置かれ、ホストである母語話者が言語行動に調整を行い、ゲストを支援している。一方、言語ゲストである非母語話者も何らか形で言語行動の調整を行うので、接触場面には双方がどのような言語行動の調整を行っているかを知ることが重要な課題となる。言語調整の多くは、言語ホストとゲストの間にある言語能力の差が主な原因になっているが、村岡 (2016) は、滞在が長期化された非母語話者には言語問題への対処の仕方に習慣的なパターンが生まれると述べ、言語熟達度と接触度合によって使用されるコミュニケーションストラテジーの種類に違いが生じると指摘している。このように、非母語話者は言語問題の生起を減少しようとし、言語の事前調整を行うが、このような非母語話者を話し相手にして、母語話者はどのような言語調整を行うかが次の課題となる。

接触場面における母語話者の言語調整またフォリナー・トークの使用についての研究はそのメカニズム、使用の意識、ストラテジーの分類に関するものが殆どであり、自然会話を対象にした研究は少なく、実際にはどのような言語形式を用いて FT を行うのかまだ十分に研究されていない。

そこで本研究は、日本語母語話者と上級日本語学習者との接触場面を対象にし、母語話者の言語

調整を調査する。また、母語場面の会話とも比較し、母語場面と接触場面における母語話者の言語調整の違いについても明らかにしたい。

先行研究

コミュニケーションストラテジー (CS)

CS は Selinker (1972) によって提案された用語で、第二言語における学習過程の一つとされている。Tarone (1981) によると、CS は必要となる意味構成が共有されない場合に会話参加者が相互的に行う意味交渉の試みである。本来、CS は中間言語能力の不足 (interlanguage deficiencies) に起因するコミュニケーション問題に対処するための言語ツールとして見なされる。対象となる主な問題はリソース不足 (resource deficits) である。ここでいうリソース不足は、話し手の言語知識のずれ (gap) によって生まれる言語化の困難を指している (Dörnyei & Scott 1997: p 182-183)。

70 年代から 90 年代にかけて CS に関する研究が盛んに行われ、研究者によって様々な分類が行われた。本研究は Dörnyei & Scott (1995a, 1995b) の分類に従う。Dörnyei & Scott (1997) の引用による) は、言語知識のリソース不足の他に自分の能力による問題 (Own-performance problem)、他者の能力による問題 (Other-performance problem)、処理時間による重圧 (Processing time pressure) を加え、言語化の困難だけではなくコミュニケーション上の問題全体を対象にしている。さらに、対象方法を大きく 3 つに分け、直接的ストラテジー (Direct Strategies)、対話的ストラテジー (Interactional Strategies)、間接的ストラテジー (Indirect Strategies) としている。Dörnyei & Scott による CS は以下の表 1 に示す。

表 1 Dörnyei & Scott による CS の分類

DIRECT STRATEGIES		
Resource Deficit	Own-Performance	Other Performance
Message Abandonment Message Reduction Message Replacement Circumlocution Approximation Use of all-purpose words Word-coinage Restructuring Literal translation Foreignizing Code Switching Use of similar sounding words Mumbling Omission Retrieval Mime	Self-rephrasing Self-repair	Other-repair
INTERACTIONAL STRATEGIES		
Resource Deficit	Own-Performance	Other Performance
Appeals for help	Comprehension check Own accuracy check	Asking for repetition Asking for clarification Asking for confirmation Guessing Expressing nonunderstanding Interpretive summary Responses
INDIRECT STRATEGIES		
Processing time pressure	Own-Performance	Other Performance
Use of fillers Repetitions	Verbal strategy markers	Feigning Understanding

母語話者の言語調整：フォリーナートーク (FT)
 母語話者の言語調整のことを一般的にフォリーナートーク (foreigner talk) と言う。Tarone (1980) は、CS と FT は全く別のものではなくその一部と考えた方がいいと述べている。日本語における

FT の研究はネウストプニー (1981) から始まり、その特徴が明らかにされたが、ロング (1992) は日本語母語話者の対外国人行動の行動を以下の表 2 のようにまとめた。

表 2 対外国人行動の分析 (ロング 1992)

無返答型		①無言/無提供	
返答型	他言語の文ごとの使用 日本語の使用	②他言語 (英語など) の使用	

FT 使用型		
1. 語彙面	③他言語の単語使用 ④外来語の頻用 ⑤日本語による言い換え ⑦語、節の繰り返し	(1)訳語 (2) 臨時借用語 (1) 同義語 (2) 積義 (分析的言い換え)
a. 文法面	⑧文法の簡略化	(1) 短い文の頻用 (2) 格助詞の省略 (3) 複雑な文構造の回避 (4) 敬語の回避 (丁寧体の使用) (5) 丁寧体のお回避 (6) 指定表現「ダ」の省略
b. 音声面	⑨聞き取りやすい発音	(1) 話すスピードの減速 (2) 拍を区切った発音
c. 談話面	⑩明確化の要求・理解の確認	
d. FT 無使用型	⑪全国共通の使用 / 生活語 (方言) の使用	
2. FT 無使用型	⑪全国共通の使用 / 生活語 (方言) の使用	

自然会話の接触場面における言語調整の先行研究

熊井 (2007) は 1 人の母語話者と 1 人の台湾日本語学習者の 10 分間接触場面を対象にして協働作業を可能にするための教師の役割について調査している。その結果、母語話者による言語調整は、難しいと思われる単語や場所の名前の後にポーズを置き、「ってわかる？」という理解確認や、英単語使用などのストラテジーが採用されることがわかった。

熊井 (2007) の結果から、母語話者はどのような言語形式を用いて言語調整を行うかが少し明らかになったが、母語話者は日本語教師であるため、生徒である非母語話者の理解を心配して「ってわかる？」を発言したとも考えられる。言語調整の言語形式を明らかにするためには、教師と生徒の関係以外を収録したより大きいデータを使った調査が必要と考えられる。

データ

迫田 et.al (2016) の調査によると、主な非母語話者コーパスのデータ収集は、BTSJ と C-JAS を

除くと、OPI (Oral Proficiency Interview) という方法で実行されている。そのため、会話の流れが一方的になりがちで、言語調整の工夫も自然会話より多いだろう。したがって、より実際の日常会話に近い状況を観察するため、本研究は自然会話を収録するコーパスを利用することにした。母語場面のデータとして『名大会話コーパス』を利用し、接触場面のデータとして『名大日本語学習者会話コーパス』を利用する。両コーパスはサイズが違うが、同じ手法で構築され、データ収集の違いによる影響が最小限であり、比較するには適切と考えられる。

『名大会話コーパス』 Nagoya University Conversation Corpus (NUCC)

『名大会話コーパス』は科学研究費補助金による共同研究「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパスによるコロケーションの研究」の一環として構築され、国立国語研究所より文字化資料が「研究用データ」として公開されている (藤村他, 2011: 44)。

参加者は男性 162 名と女性 37 名、計 199 名の日本語母語話者である。年齢は 14 歳から 92 歳で、さまざまな地域の出身の人たちである。元指導教員、同級生、サークルとアルバイト仲間、高校時代の友人、大学の先輩、大学の後輩、同僚、恋人、夫婦、元上司、兄弟・姉妹、初対面の人との会話で構成されており、車の中や大学、飲食店などで録音されている。¹

『名大日本語学習者会話コーパス』 Nagoya University Japanese Learners Conversation Corpus (NUJLCC)²

NUJLCC は NUCC の構築を平行して、大曾美恵子氏のプロジェクトとして設計され、NUCC と同じ条件で構築されている。19 時間の接触場面会話が 28 の会話データに収録されている。各会話の長さは殆ど 30 分から 45 分で、最も短い会話は 13 分で、最も長い会話は 107 分である。このうち 4 つのデータは非母語話者同士の会話である。また、メタデータとして、年齢、性別、出身地、職業、日本語能力、在日期间、話し相手との関係も収録されている。会話参加者同士は顔見知りで、同級生からアルバイトやサークル仲間まで様々な関係で構成されている。データ収集は大学の院生室、カフェ、参加者の実家など様々な場所で行われた。すべて自由会話である。

文字化の問題点

藤村他 (2011: 46-48) によると NUCC にはいくつかの問題点がある。それは①相づちの認定②聞き取りの難しさ③漢字表記の発音④文字化担当者による文字化個人差³である。NUJLCC も同じ方法で収集されたため、同じ問題を抱えている。

NUJLCC の文字化データは電子データの紛失により紙媒体に印刷されていたデータがオリジナル

であった。著者はまずデータを OCR (光学文字認識 Optical Character Recognition) で電子化した。しかし、現在の OCR の技術は不完全であり、いくつかの文字の誤認が確認された。例えば、「個」が「田」として、「う」が「ラ」として認識された。対策として、著者は 2 つのチェックを行った。1 つ目は母語話者チェックで、母語話者に音声を聞きながら文字化資料を確認してもらった。2 つ目は、以下に述べる形態素解析 (morphological analyzer)⁴ の結果に対するチェックで、解析結果に疑わしいもの、または理解不能なレジスターがないか確認したり、その形態素の前後のレジスターを確認して、理解可能かどうかを検証した。誤認の文字は殆ど前後のレジスターとの関連が見えず、品詞上は記号として分類されることが多い。上記のチェックを実行しても、誤り残存している可能性は否定できないが、データへの影響は制御できたと思われる。

分析方法

語彙頻度表を基にした予備調査によると、出現する単語の種類に関して NUJLCC の母語話者は NUCC と同じ傾向を示し、NUJLCC 母語話者特有な単語または NUCC 特有な単語の出現は見られない。NUJLCC と NUCC に関する限り、母語場面と上級日本語学習者との接触場面には単語使用の相違が見られないと言える。しかし、単語のレベルでは相違が見られなくても会話のレベルではなんらかの調整が行われていると思われるので、n-gram⁵ を採用して検証する。n-gram を使用することで、1 形態素以上の連鎖のデータを得ることができ、文末表現や語句などのような 1 単語を超える連語を観察することが可能になる。

コーパスデータを使えるようにするにはまずデータベースの構築が必要である。n-gram データベースと実例データベースという 2 種類のデータベースを構築した。

n-gram データを作るために、まず NUCC と NUJLCC の会話データを 3 つのグループに分け、NUJLCC の母語話者群(以下 NS)、非母語話者群(以下 NNS)、NUCC の参加者(以下 NUCC)と名付けた。そして形態素解析⁶を実行し、単語を形態素に分割した。次に、各グループの形態素解析の結果をテキストエディターでレジスターのタイプ別にし、頻度順に並べ替え、語彙頻度表と n-gram 表(2-gram から 7-gram まで)を作成した。形態素解析の結果の例は以下のようなものである。

料理	名詞	の	助詞	ネタ	名詞
なんか	助詞	は	助詞	。	補助記号
料理	名詞	の	助詞	話	名詞

しかし、NUCC と NUJLCC の参加者の数が異なるため、コーパスサイズ(語彙総数)にかなり差がある。したがって、本研究では、頻度ではなく生起順位を用いて比較を行う。比較する際、順位の違いを使用率の相違のヒントとし、使用率の傾向が異なる言語形式を選出し、実用例データベースを作成した。

結果と考察

本研究は、n-gram のデータベースから 2gram から 7gram までのデータを抽出して観察した。2gram から 7gram までの結果を観察した結果、言語調整の結果によると思われる表現が幾つか観察されたが、本稿はそこから母語話者と非母語話者間で順位の差が大きい 3 つの表現に注目する。すなわち、NNS と NS とともに頻繁に使用するター

ン末の「うん」、NS が多く使用する「そうなんだ」、と NUCC において多く使用されている「とか言って」の 3 つである。

話し手によるターン終了標識としての「うん」

NS の ngram データでは、相手の相づちの直後の「うん」が高い頻度で出現することが観察された。4gram では「(うん) うん」が 16 位、5gram では「(うん) うん。」が 11 位、6gram では「(うん) うん。」が 1 位であった。また、NNS でも同じ傾向を示し、それぞれ 19 位、15 位、3 位で NS と近い順位にある。一方、NUCC の ngram データでは、それらのレジスターはどれも 50 位以下の順位であり、NS と NUCC の使用率に大きな差を示している。

以上の傾向は「(うん) うん」だけに限らず、例えば 4gram の「(ふーん) うん」、「(へー) うん」、「(ああー) うん」、「(はい) うん」、「(ねえ) うん」、「(ええ) うん」などでも、NS と NNS は NUCC より高い順位を示している。また、このような「うん」の後に話者交替が生起することも観察され、話し手は「うん」をターン終了標識として使用すると考えられる

「うん」は相づちとして continuer 又は「続けてというシグナル」の機能を持ち、多くの研究(ザトラウスキー, 1993、メイナード, 1993、堀口, 1998 を参照)に報告されているが、どれも聞き手という立場で発し、多くの場合、相手の発話中または発話と発話の間にあるポーズに打たれる。しかし、田窪・金水(1997: 265)は、文末に出現する「はい」と「うん」が「こちらの出力が終わったので、そちらで処理に移りたい」と意味すると述べ、「うん」にはターン終了標識の機能があるという本研究の観察と一致している。

(1)
NNS21: そう、だから、(ふーん) そういう知覚実験とかやるときに、(うん。ふーん) DAT じゃなければ、(うん) うん。そうね。うん。
(NUJLCC、データ 224)

(2)
NS8: 切らないとだめでしょ、結局。(うん) うん。そう。
(NUJLCC、データ 210)

(3)
F099: うーん。でも、ほら、歩くのはさ、わたしたち、夏に旅行行くとよく歩くから、(そうね、うん) そういう意味で、(うん) うん。
(NUCC、データ 048)

母語場面と接触場面の日本語会話における話題展開を研究した Nakai (2002) によると、ターン末に打つあいづちは話題終了という機能を持ち、母語話者にも非母語話者にも話題終了手段として最も多く使用されると指摘している。また、母語話者と非母語話者の使用率の比較により、非母語話者は母語話者に比べて話題終了手段としてあいづち多く使用しており、非母語話者の母語である英語からの負の転移 (negative transfer) の可能性を示唆している。

本研究におけるターン末の「うん」は Nakai (2002) ものと似ているが、本研究の参加者には英語母語話者はおらず、本研究では英語の負の転移が原因であるとは言えない。

しかし、NS と NNS が似た傾向を示し、NUCC が違う傾向を示しているため、これが NS と NNS の間のコミュニケーションストラテジーと言える可能性は高い。普段の母語話者同士の会話には話者交代がスムーズに行われるが、接触場面で話者交替をスムーズにやるには発話末を明確にする必要があり、そのために非母語話者だけでなく母語話者も母語場面と比べて普段より頻繁に「うん」を打つと考えられる。

質問の多用の結果による「そうなんだ」の産出

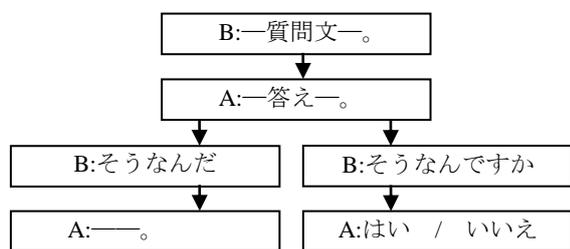
7gram のデータを観察すると、NUCC では「: あ、そうですか。」⁷ 「: あ、そうなの。」 「あ、そうなんだ。」のどれもが上位 25 位に入っている一方、NS では「あ、そうなんだ。」は 4 位、「あ、そうですか」と「あ、そうなの」は 100 位以下に下がっている。また、6gram データの中に「そう」が他の後に続くもの、「へー、そうですか。」「うん、そうなの。」なども含めて観察すると、7gram データと同様、NUCC に比べて NS は「そうなんだ」を高頻度で使用していることがわかる。「そうなんだ」の使用例は以下の通りである。

(4)
NS21: 日本より暑いんだっけ。
NNS23: はい、寒いんですね。(寒いですよ) はい。
NS21: でも、夏も?
NNS23: 夏は暑い。
NS21: 夏は日本より暑いんですけどよね。
NNS23: はい、西安は、中国だっていうと一、(はい) あ、4 つの一、(うん) いっぱい暑いところがあって、(うん) 4 つのストーブというんですよ。<笑い> (<笑い>) 中国で。(はい) 西安がそんな中の 1 つ。
NS21: ああ、そうなんだ。
NNS23: うん、もう夏はストーブ。(うん) うん。(うーん)
NS21: 名古屋も暑い。
NNS23: 暑いんですね。(うん) でも名古屋の暑さは、たまらない。(たまらない) うん、蒸し暑い。(うん) 向こうは、サラサラの方で。(日本の夏はあんまりね) 汗がすぐ出ちゃうんですよ。
NS21: 私も好きじゃない。(うん) うん。
(NUJLCC、データ 226)

(5)
NS1: サントン省という、あの、三国志の魏・呉・蜀でいうと、魏のところ? 呉?
NNS1: あの、曹操のところ。
NS1: あ、魏のところ。(うん、魏のところ) おー。(そうそうそう) あ、そうなんだ。(うん)
NNS1: 三国志、結構好きです?
NS1: 好き。なんか、(うん) 原文をしっかりと読んだこと一、(ない) あ、でも、あるんだけど、忘れちゃって、わりと漫画とか結構あるんですよ。
NNS1: おもしろいですね。(そうですね)、そうそう(うん) 僕もそう思うんで。(略)

(NUJLCC、データ 201)

図 1. 「そうなんだ」「そうなんですか」の産出に至る会話連鎖の構造



(郷矢, 2014: 175 一部の引用)

郷矢 (2014: 177) によると「そうなんだ」は情報に対する疑念がなく確かであると自分に向けられた自己指向的発話であり、「そうなんですか」の代用として学生、院生、特に若い女性の間で目立って観察される。図 1 は「そうなんだ」「そうなんですか」の産出に至るまでの会話の連の構造を示しているが、この図からわかるように「そうなんだ」と「そうなんですか」は聞き手が開始した質問が生起原因である。また、(5)で見られるように、相手の返事に対する返事としてではなく、話し手のターンが行使中に行われる相手の相づちに対するの返事として「そうなんだ」の用例も観察できた。

(5) の「そうなんだ」の出現位置を考えると、「そうなんだ」はターン終了標識として使用されると捉えることができる。

Larsen & Long (1991: 122-123) によると一般的に FT の会話では母語話者は断定文より疑問文を好み、話題導入の方略として用いている。また、質問の形式は、非母語話者に負担の少ない「選択疑問文」(or-choice questions) と「はい・いいえ疑問文」(yes / no questions) が主である。

上記の「そうなんだ」の用例から見られるように、母語話者は (4) では「はい・いいえ疑問

文」、(5) では「選択疑問文」で話題を導入して、会話を展開しようとしている。また、図 1 からわかるように、「そうなんですか」には「はい・いいえ」が後続すること多い一方、「そうなんだ」は自己指向的な性質を持つため、自由な発話が後続することが可能である。そのため、会話を展開するには「そうなんだ」で応答した方が話し相手を自由に発話させることができると言え、「そうなんですか」より「そうなんだ」が選択されるのも言語調整の一つと考えられる。

「そうなんだ」はトピック導入のための多用な質問という言語調整の結果であると同時に、話し相手に自由な発話の機会を与えるという言語調整としても捉えることができると思われる。

「引用」と「発話軽減」として機能とする「とか言って」

4gram データを順位に基づいて比較した結果、NUCC では「とか言って」という表現が NS より頻繁に使用されることがわかった。NUCC では「とか言って」が 25 位にあるが、NS と NNS では 100 位-200 位の範囲に入り、どちらも NUCC に比べるとかなり順位が低い。

「とか言って」は本来「と言って」という引用表現に不確かさを表す「か」を加えることであいまいさを訴える引用表現である。NUJLCC の NS と NNS では「とか言って」を主に引用表現として使用しているが、NUCC では引用表現以外の用法も多く見られた。引用表現としての「とか言って」は以下の通りである。

(6)

NNS8 : でも、頑張ってもだめなものは。

NS7 : だめなものは、てかたぶん、特に生の魚は(そう)別に食べなくてもいいと思う。やっぱりそ

んなもん、ねえ、だめなもの、だめです。(そうそう) いいと思う。でもあたしね、1 回びっくりしたのは、アメリカの子と韓国の子とご飯を食べにいて、(うん) 2 人ともがね、イカが好きとか言
って、(うんうん) イカを頼むの、なんか。なんかさあ、日本人のイメージで、外国人、あんまりイカとかタコを食べないみたいなの。

(NUJLCC、データ 208)

(7)

NNS10: そうそうそう。何とも思っていないみたいね。

(そっかそっか) でもすっご、い感動したー。(ふうん、そっか) うん。あと先生にも、いろいろ台湾風のこととかやってもらって。<笑い>

NS8: 台湾風、あー。

NNS10: 例えば、たばこ勧めたり。(あー) あの、火をつけたりするようなこととかね。

NS8: 知らない人に?

NNS10: うん、違う、あの、J さんのお父さんとかにね。うん。(あー、へえ) だから、先生、やってみた今 (笑い) どうですか?とか言
って。<笑い> (はあー) お互い喜んでた。<笑い>

(NUJLCC、データ 210)

メイナード (2005: 373) によると「とか言

て」はメタ言語表現として機能して、「発話行為の軽減」という働きを持つ。これは自分の言ったことの恥ずかしさをまぎらわしたり、あまりにドラマチックだったりする自分を笑ったりするときに使用されることが多い。また、「とか言

って」と似たような表現として、「なんて言

って」と「なんちゃって」もあげられる。この機能は母語場面である NUCC のデータには多く観察されたが、NUJLCC には 3 つしか観察されず、3 つとも 1 人の非母語話者による発話であった。

「とか言

って」は接触場面では主に引用表現としてのみ使用されるが、母語場面ではメタ言語表

現、引用表現の両方として使用される。また、母語場面の「とか言

って」の方が高い使用率を示している。母語場面の NUCC では話し手のターンの途中で使用される本来の「とか言

って」とは異なる使用例が観察される。以下のように相づちのように話し相手のターン終了直後に使用されている例もある。これは、(8) の F161 が自分の前のターンで話した恥ずかしい出来事に対する「発話の軽減」の行動であると考えられる。

(8)

F161: なんか、1 日、(うん) なんかね、6 グループぐらいになって、(うん) あっ、あん? 6 グループじゃない、6 人で 1 グループぐらいになって、(うん) 1 日に 6 時間ぐらいガートとやんだって、(へえー) 生徒集めて。(ふうん<笑い>) 私、この前さー、(大変) まちがえてさー、(うん) その一、日本語教育のさ、その一、話し合いみたいなのここに行っちゃってさー、(うん) 私は行かなくてよかったのよー。

(後略)

F062: はあー。そういうのをやっぱ計画立てて一、(うん) やるんだねー。(ねー、ねー) うーん。へえー。

F161: とか言
って。やばい。

F062: あー、そうゆ、なんかそういうときってさー、(うん) なんか帰りたいんだけどさー、途中で帰ることもできずみたいなの。<笑い>

F161: そうそうそう。

(NUCC、データ 071)

このように母語場面である NUCC には様々な機能の「とか言

って」が使用されているが、上に述べたように接触場面である NUJLCC では引用表現としてしか使用されていない。なぜ NUJLCC の参加者が引用表現としてのみ使用しているかを NS と NNS の視点から以下に説明を試みる。

先に述べたように「とか言って」は本来「引用」の意味で使用されるが、次第に「発話の軽減」という新しい意味が付いた。Heine (2002)によると文法的な意味の拡張は4つの段階に分けられ、初期段階 (Initial stage)、橋掛けコンテキスト (Bridging context)、切り替えコンテキスト (Switch context)、一般化 (Conventionalization) という順に展開する⁸。「発話の軽減」としての「とか言って」は「一般化」の段階に到達したものだと考えられ、本来の「引用」という意味から全く異なる意味を持つようになった。なお、本来の意味と異なる意味を持つため、「発話の軽減」を意味する「とか言って」は非母語話者にとって理解も使用もしにくい表現であるため、不使用に繋がると思われる。

一方、母語話者であるにも関わらず NS が「とか言って」を引用表現としてのみ使用する理由は、FT を行っているからであろうと推測される。上記のロング (1992) による対外国人行動の分析 (表 2 参照) を見ると、この行動は文法面の文法簡略化の区分に入ると考えられる。

結論と今の課題

従来、言語能力のずれまたはリソース不足が CS 又は FT として言語調整の原因とされてきたが、非母語話者の熟達上がるにつれて、母語話者にとって理解不能な表現は少なくなり、使用される言語調整も初級・中級学習者相手との場合とは異なるであろうと上に述べた。上記の「うん」、「そうなんだ」「とか言って」から見られるように、母語話者と上級学習者の接触場面には、単語のレベルではなく、談話のレベルで言語調整が実行されていることが明らかになった。ターン終了標識としての「うん」は話者交替をしやすくする

ために、話者の発話終了部を明確するという言語調整である。「そうなんだ」は母語話者による質問の多用という言語調整の結果であると同時に、話相手に自由な発話の機会を与えるという言語調整である。また、出現位置によって「うん」と同様、ターン終了標識としても使用できる。そして、「とか言って」は NUCC ではより高い使用率を示す一方、NS では基本の機能のみで使用され、使用率も低いため、これは母語話者による文法簡略化であろうと考えられる。

以上、本稿では NUCC と NUJLCC の n-gram データベースにおける生起順位の差を基にして、母語話者の言語調整、相手が母語話者の場合と非母語話者の場合調査したが、今回は上位のものでかつ順位の差が大きいもののみ注目した。今後は、順位の差の大きさを問わず広く調査をすすめたい。

注記

¹『名大会話コーパス』参加者の詳細は次の国立国語研究所のサイトから確認できる。
(http://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/nucc_conversant.html)

²このコーパスは現在非公開である。このコーパスは本研究のために、NUCC の代表である大曾美恵子氏と藤村逸子氏より提供された。

³文字化担当者による文字化の個人差というのは、例えばある担当者は「そう、そう、そう」をそのまま文字化し、別の担当者は「そ、そ、そ」と文字化する場合などである。

⁴形態素解析というのは検索エンジンにも用いられている自然言語処理の手法の一つで、ある文章・フレーズを「意味を持つ最小限の単位 (= 単語)」に分解し、文章やフレーズの内容を判断するために用いられます。

(<https://www.seohacks.net/basic/terms/morphological-analysis/>)

⁵N-gram とは、n 個の要素 (文字や単語あるいは形態素など) の連続を意味する。(滝沢, 2011: 37)

⁶形態素解析ツールはさまざま存在するが、著者は UNIX 上で mecab という解析エンジンを使用している。Mecab についての詳細は公式ウェブ (<http://taku910.github.io/mecab/>) に確認できる。また、mecab には解析の元になる辞書が組み込まれているが、本研究に使用される mecab は UNIDIC という辞書を作用する。

⁷「:」はターンの始まりを表す。

⁸日本語訳は著者によるもの。

参考文献

村岡英裕 (2016) 「接触場面研究のパラダイム」
村岡英裕、サウクエン・ファン、高民定編
『接触場面の言語学』ココ出版 3-18.

滝沢直宏 (2011) 「大規模コーパスに基づくコロケーションの研究」藤村逸子、滝沢直宏編
『言語研究の技法：データの収集と分析』ひつじ書房 25-42.

迫田久美子、小西円、佐々木藍子、須賀和香子、細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』 6(3), 93-110.

ネウストプニー, J.V. (1981) 「外国人の日本語の実態 (1) 外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』 45, 30-40

ロング、ダニエル (1992) 「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォリナー・トークを中心に—」『日本語学 (特集：外国人とのコミュニケーション)』 11(3), 24-32.

藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011) 「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子、滝沢直宏編
『言語研究の技法：データの収集と分析』ひつじ書房 43-72.

田窪行、金水敏 (1997) 「応答詞 感動詞の談話的機能」音声文法研究編『文法と音声』 257-279、くろしお出版。

郷矢明美 (2014) 「聞き手の反応に見られるあいづち性と応答性：話し言葉コーパスにおける「そうですか」「そうなんだ」「そうか/そっか」を中心に」『言語コミュニケーション文化』 11(1), 165-180.

メイナード、K. 泉子 (2005) 『談話表現ハンドブック』くろしお出版

Dörnyei, Z., & Scott, M. L. (1997). Communication strategies in a second language: Definitions and taxonomies. *Language learning*, 47(1), 173-210.

Heine, B. (2002). On the role of context in grammaticalization. *Typological studies in language*, 49, 83-102.

Larsen-Freeman, D., & Long, M. H. (1991). *An introduction to second language acquisition research*. Routledge.

Nakai, Y. K. (2002). Topic shifting devices used by supporting participants in native/native and native/non-native Japanese conversations. *Japanese Language and Literature*, 36(1), 1-25.

Neustupny, J. V. (1985). Problems in Australian-Japanese contact situations. *Cross-cultural encounters: communication and*

miscommunication, Melbourne: River Seine, 44-84.

Selinker, L. (1972). Interlanguage. *IRAL-International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 10(1-4), 209-232.

Tarone, E. (1980). Communication strategies, foreigner talk, and repair in interlanguage. *Language learning*, 30(2), 417-428.

Tarone, E. (1981). Some thoughts on the notion of communication strategy. *TESOL quarterly*, 15(3), 285-295.

アッペンディックス

表 3. NUCC と NUJLCC の異なり語数と述べ語数

コーパス名称	異なり語数	述べ語数
NUCC	24,136	1,082,150
NS	5,342	85,191
NNS	5,638	87,314